

八月一五日

報告：鷺巣 力

梗概

本章では8月15日をはきんで前後3カ月ほどの日本の状況と、加藤が感じたこと考えたことが述べられる。加藤の所属する佐々（さっさ）内科は1945年の春に信州上田の結核療養所に疎開する。疎開先の医療機関でも、事務員たちは「防空演習」に勤しんでいた。ここでも加藤は反戦的態度から孤立感を抱いて暮らしている。信州に疎開したのは加藤が属する内科教室だけではなく、加藤の母と妹とその幼子たちは信州追分に疎開した。追分には、片山敏彦も、母織子の同級生一家も、疎開した。戦況は厳しいにかかわらず、大日本帝国政府も新聞も「本土決戦」「竹槍戦術」「水際作戦」「一億玉砕」を叫んでいる。しかし、広島への原爆投下、長崎への原爆投下、ソ連の対日参戦が続き、いよいよ「本土決戦」か「降伏」かの選択しかなかった。8月10日を境に新聞が「国体護持」を強調し始めたことに加藤は気づく。8月15日に重大放送を予告され、「玉音放送」を聞く。戦争は終わった。ある晴れた日に始まった太平洋戦争は、3年8カ月後の晴れた日に終わった。アジア太平洋地域で戦争によって命を落とした人は2000万人といわれる。加藤は「歌いだしたい」ほどの喜びと解放感を味わった。加藤は敗戦を民主主義の勝利だと考えたが、築地小劇場で活躍した鶴丸は「帝国主義相互の戦争が一方の勝利に終わったにすぎない」といった。9月初めに加藤は東京に行く。東京はすべてが焼き払われていた。しかし、夕焼けの空は本当の空であり、瓦礫のあいだの夏草は本当の夏草だと感じた。たとえ焼け跡であろうとも、嘘で固めた宮殿より美しいと感じた。

第1段落～第2段落

いくさの最後の年、一九四五年の春に、本郷の大学の内科教室は、信州上田の結核療養所に「疎開」した。「疎開」は、大学が計画したのでも、医学部が手配したのでもなかった。各教室がそれぞれ個別的に、教授や医局員の個人的なつながりを辿って、器材や医者や、入院患者の一部さえも、東京から遠く離れた山中に移したのである。行先の設備や建物は、もとより、教室の全体を容れるには、足りず、鉄道の輸送は、すでに工場の「疎開」と焼け出された人々のために混雑して、困難を極めていた。しかし内科教室の上田への「疎開」ほど——それは入院患者の少数と医局員の辛じて三分の一にすぎなかったが、私にとって有難いものはなかった。

私の家は焼けて、もはや東京にはなかった。その頃の父は、伊豆の療養所でひとりで暮らしていた。妹はいくさのはじまった頃に結婚し、二児を得ていたが、夫は中国の戦線にいて、いつ帰るかわからなかった。母はしばらく、妹とその二人の子供をひきとり、夏を過ぎていた追分村の家で戦争の最後の年をしのごうとしていた。妹は子供を母にあずけ、衣類と食糧を交換するために、近在の村を歩き廻り、母は

わずかな火山灰の土地を耕して、蕎麦やかぼちゃをつくろうとしていた。教室と共に上田へ「疎開」して後、私は、農家へ往診する機会のある毎に、米・みそ・蕎麦を謝礼としてうけとり、週末にそれを追分へはこぶことができたのである（212—213頁、改240—241頁）

[1] 機能を失った大学

本郷の内科教室の「疎開」は、大学が計画したのでもなく、医学部が手配したのでもない。組織的な判断で疎開が決断されたのでもなく、組織的な行動として疎開が実行されたのでもない。個人の伝手や才覚を恃んで実行された。大学や医学部が、戦争末期に到って、組織としてまったく機能しなくなっていたことを意味する。

加藤が所属した佐々内科が疎開したのは「信州上田の結核療養所」だと書かれており、1944年に創設された日本医療団上田奨健寮だと思われる（のちに国立東信病院となり、今日は国立病院機構信州上田医療センターとなる）。他の医局も、あるいは山形に、あるいは福島に、と自分たちの伝手を頼って疎開した。

[2] 「疎開」とは

「疎開」とは、太平洋戦争末期に、1943年12月に閣議決定した「都市疎開実施要綱」に基づき、生産施設や人口、建物などの空襲被害を軽減することを目的に、都市部にある建物を取りこわし——延焼を防ぐための空き地帯をつくるためだった——あるいは工場を移転し、あるいは都市に暮らす人員を動かしたことをいう。人的な疎開は成人に対して行なったのみならず、小学校の児童も「学童疎開」させられる。1944年6月に「学童疎開実施要綱」を決めて、大都市の国民学校初等科3年生から6年生の児童を半ば強制的に農村に疎開させた。1945年春には学童疎開の数は40万人に達したといわれる。しかし、疎開先での授業はままならず、さまざまな問題を引きおこした。

[3] バラバラになった加藤一家

加藤一家は世田谷区赤堤に——そののちに世田谷区松原に——借家住まいしていた。ところが、父信一は、三浦半島の野比の海軍病院に「単身赴任」していた（本村久子氏談）。本文中にあるように「伊豆にある療養所」には行っていない（久子氏談）。妹久子氏は本村二正との婚姻を1943年に届け出て、世田谷区東松原に住んだが、夫二正は出征してしまった。しかも二男正二郎氏を出産するときに、埼玉県北本の新井家（加藤の伯母の嫁ぎ先）に世話になった。加藤は病院に暮らし週末に家に帰るだけである。このように加藤一家はばらばらに暮らしていた。

ところが、母織子が信濃追分に疎開したため、1945年のはじめに、妹久子氏は幼い子どもふたりを連れて、信濃追分に疎開した。加藤が疎開した信州上田と母と妹が疎開する信濃追分は、距離にして40キロほどしか離れておらず、しかも鉄道一本で結ばれている。往診の謝礼としてもらった食料を追分に暮らす母織子と妹久子氏に届けることもできたのだから、加藤にとって上田の疎開は「有難かった」に違いない。

「私の家は焼けて」とあるが、この「家」とは戦時中に加藤が住んでいた借家ではなく、加藤がかつて住んだ金玉町の家のことである。美竹町に引っこしたとき、金玉町の家を横河グループ一族のひとりに貸したのだが、その貸家が焼けたのだった。加藤家が

所有する家が焼けたのだから、「私の家が焼けて」と表現しても、間違いとはいえないが、誤解を招きやすい表現ではある。

「横河グループ」は、建築家・工学博士の横河民輔が興した企業グループ。誰に貸していたかは不祥。

[4] 通貨さえ通用せず

「衣類と食糧の交換」が意味すること。一五年戦争末期および敗戦直後には、食糧不足は恒常的だった。とりわけ生産手段をもたない都市勤労生活者は深刻である。勤労生活者の人びとは、農家を訪れては食糧を手に入れた。農家の人びとは、紙幣は紙切れ同然だと考え、物々交換を求めた。食糧と交換するのはおおむね衣類であった。

国家が成立すると真っ先に着手するのは、度量衡の統一と通貨の確定である。度量衡と通貨は国家成立の条件である。ところが、一五年戦争末期には、度量衡はともかくも、通貨の信用性はまったくなかった。要するに、貨幣経済は崩壊し、交換経済が復活していたのである。さきに触れた「疎開」の手続きが各医局の采配に委ねられていたことといい、通貨よりも物々交換が行なわれていたことといい、国家の体をなしていなかったことを物語る。

医者の治療代も、貨幣で支払われるのではなく、農産物で支払われた。それは加藤および加藤の家族には「有り難かった」に違いない。

第3段落

浅間山麓の高原は、食糧不足の時にながく暮すには、適当な場所ではなかった。長い冬は厳しく、火山灰の土地に痩せていて、農家は貧しかった。東京を焼け出された人々が、軽井沢や千ヶ滝や追分村にまで集って来たのは、土地柄を「疎開」に適当だと考えたからではなく、他に行く処がなかったからであり、夏の避暑地の他には農村とのつながりが失われていたからである。衣類との交換で土地の農家が提供することのできる食糧には——農家はもはや信用のおけなくなった紙の通貨を受けとらなくなっていた——そもそも限度があり、また疎開者の誰もが無制限に交換すべき衣類を貯えていたわけではない。北軽井沢の高原の家に「疎開」した片山敏彦教授は、やがてそこでは暮してゆくことができなくなり、山を降りて、小諸の町にちかい村の、農家の一部屋を借りて住んだ。そこには、それより早く、山室静氏が住みついでいて、片山教授のために、部屋を探したのである。山室氏は信州の人である。片山教授は土佐の人で、長く東京に暮し、信州では全く根無し草にすぎなかった。土地の人のよろこぶ羊毛の衣類をほとんどもたず、ただ独仏語の詩集をもっていたにすぎない。片山教授がその農家の一部屋から追分の私の家まで出て来たときに、春のから松の林は、烟のように柔い緑の芽をふきだし、林のなかの径には、小鳥の音がみちていた。「この林はザルツブルグの夏を想い出させるね」と片山教授は、突然いった。私は、この夏を生きのびることができるだろうか、と考えていたが、詩人片山敏彦は、多分そのときモーツァルトのことを考えていたのであろう。追分村には母の昔の同級生の一家も「疎開」して来ていた。その長女は近衛師団の旗手と結婚していて、陸軍大学校へ通っているというその眉目秀麗の青年

が、村へあらわれたこともある。主人は退役の軍人で、中学校の校長をしていた。その一家が食糧に窮するということはなかった。また別の同級生は大商事会社の重役に嫁し、二男二女があり、結婚して子供のある長女を追分村に「疎開」させていたが、彼女は「ぜい沢」な衣類を沢山もっていたので、飢える心配はなかった。しかし米国で生れ、米国で育ち、「ぜい沢」な生活に慣れていたためであろう、たえず窮乏の生活を呪いつづけた。私の母は、「わがままで困った人だ」といいながら、彼女に泣きつかれると、土地の人に口を利いてやったり、しかるべき注意をあたえたりしていた。「はじめから敗けるとに決まっていた戦争じゃないの、もう長いことないでしょう」と彼女はいった、「ただ戦争が終ると、旦ツクのかえってくるのが困るけどね」。演奏が終って、その夫が復員して来たとき、彼女は子供を夫のもとにのこして、占領軍の若い兵士と共に米国へ去った。(213—214 頁、改 241—242 頁)

[1] 疎開者群像

「**農家は貧しかった**」：浅間山麓の土壤は火山灰地であり、土地はやせており、農業に適しているわけではない。しかも稲作ができない。農業のなかで実入りの良いのは稲作であった。稲作ができないと農業経営はなかなかむづかしい。

この件よりしばらく疎開者の姿を描く。片山敏彦は北軽井沢の山中に疎開したが、そこで自給自足生活も送れず、人的関係もなく、人里に戻った。片山に小諸の農家を紹介した「**山室静**」(1906—2000)は、鳥取県出身だが長野県佐久に育った人である。いわば地元であるから知己も多い。戦中から戦後にかけて、『批評』や『高原』や『近代文学』の創刊に加わった文芸評論家でもあり、編集者でもある。片山に部屋を探そうと考えたのは、そういう職業に就いていたことも作用していただろう。

「**この林はザルツブルグを思い出させるね**」と片山はいうが、信濃追分のあたりはザルツブルグかどうかはともかくも、ヨーロッパの高原に似る。片山について『羊の歌』に何回か言及される。片山は疎開しながらも、フランス語の詩集やドイツ語の詩集を手放さず、モーツァルトに思いを馳せ、ヨーロッパに思いを巡らせていた。あたかも林達夫が、戦時下に、イギリス風の家で暮らし、庭にシェークスピアに出てくる草花を植えることで、戦争に抵抗していたことに似る。こういう人たちが、大日本帝国政府の言い草を信じるはずもなく、世の中に背を向けて、ひっそりと暮らしていた。というよりも、ひっそりと自分の世界に入りこんで暮らすしか、自分を護る術はなかったのである。

母織子の「**同級生の一家**」とは、嘉悦学園をつくった嘉悦一家であり、その長女は嘉悦康江といった。下々の民たちは飢えに苦しんでいたのだが、上層軍人の家族には、食糧不足は無縁だった。

「**別の同級生**」が誰であるかは、不詳である。いくらアメリカに生まれ、アメリカに育ったからといって、敗色濃くなる前の日本で、「**はじめから敗けるにきまっていた戦争**」と口に出してはいえなかったに違いない。そういう言葉が公然と人前で発せられたのは、そのようにいっても罰せられることはもはやない状況になったことを意味する。その点では、機を見るに敏な人だったのだろう。だからこそ、敗戦後に、復員した日本人の夫

と敗戦国日本よりも、占領軍の若い兵士と戦勝国アメリカに可能性を見出したのである。戦争に対する態度は、親子、夫婦、兄弟姉妹、親しい友人のあいだでも違ってくる。戦争の推移が見えてくると、予測が当たった人は、外れた人に対する優位の立場になる。

第4段落

追分の村に、若い男はいなかった。娘たちも、多くは東京から近県に移ってきた軍需工場に徴用されて、農家は人で不足に苦しんでいた。それでも、私たちが毎年水汲みの仕事や家の管理を頼んでいた農家の主人は、妹の子供を見て、「わしの眼の黒いうちは、この子たちを見殺しにはしない」といった。主人はもう六十に近かったが、出征したひとり息子の嫁と二人で畑で働き、嫁が畑に出ている間、その子供は、腰の曲りかけた「ばあさん」にあずけていた。しかし畑仕事が六十の身体にこたえなかったはずはないだろう。「大東亜とか何とか大きなことをいっても」と老人はいった、「わしにやむずかしいことはわからねえが、口で大きなことをいうだけじゃ、どんなもんだかね。こう若い者をとられちまっては、どうもならないです。いいかげんにいくさをやめてもらわねば……」。(214—215 頁、改 242—243 頁)

[1] 新井作之助という筆名の由来

加藤の家が追分に別荘を購入したことはすでに述べたが、別荘を所有すると冬季のあいだの管理や、夏季のあいだでも家事の手伝いやちょっとした家の修理などを請け負ってくれる人が必要になる。今日ならば、別荘管理会社に委託するのだろうが、戦前にはそういう仕事を近くの個人に依頼することもあった。加藤の家では、この仕事のある農家の主人に頼んだのである。この農家の主人の名前を荒井作之助という。加藤が敗戦直後に著わしたふたつの著作、すなわち「天皇制を論ず」（『大学新聞』1946年3月21日。「自選集1」所収）と「天皇制について」（『女性改造』1946年6月号。「自選集1」所収）は、この「荒井作之助」という筆名を遣って書かれる。農民荒井作之助の考えを代弁する、という意味を込めたに違いない。農民にとっては、大東亜共栄圏よりも、天皇よりも、目の前の農地、その農地に植わっている作物の作柄のほうが大事である。自分たちは天皇にも政府にも助けてもらっていない、それどころか重要な労働力であるひとり息子さえも兵隊にとられてしまって、「どうにもならない」という意識をもった人たちも少なからずいたのである。

鶴見俊輔と加藤周一の対談のなかに「戦時体制に組みこまれなかった人」として、鶴見は女性をあげ、加藤は農民をあげている。加藤には身近に接した農民がいたことが、そういう判断になったと思われる。

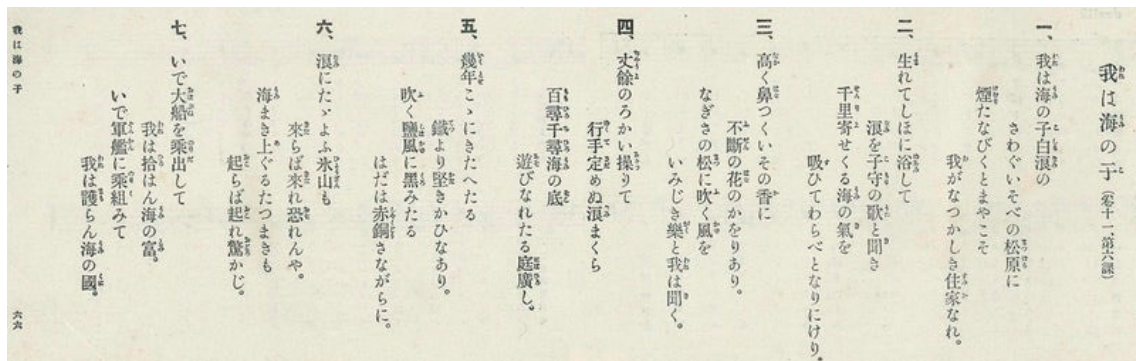
そういう考えの持ち主も、戦争が負けるという気配がないときには、口に出してはいえなかっただろう。口に出していえるようになったのは、口に出す人も、それを聞く人も、この戦争は近いうちに負けに終わることを意識していたことを物語る。

[2] 今も残る戦時歌謡

今日では「六十の身体に」畑仕事も会社勤めもこたえる人は多くはいないだろう。だ

が、戦前の日本人の平均寿命は60歳に達していない。戦時歌謡にもあるように「村の渡しの 船頭さんは 今年六〇のおじいさん 年はとつても お船を漕ぐときは 元気いっぱい 櫓がしなる」(武内俊子作詞、河村光陽作曲、1941年)のである。60歳は完全に「年をとつたおじいさん」なのである。この歌は、六〇歳の年寄りでも、お国のために働く姿を謡った軍事歌謡である。この歌の二番は「雨の降る日も岸から岸へぬれて舟こぐおじいさん 今日も渡してお馬が通る あれは戦地へ行くお馬」という歌詞である。

戦後も歌い継がれた戦時歌謡がほかにもある。一例は「われは海の子」(文部省唱歌、1910)



安倍晋三はみずから主宰する「国家安全保障会議」だったかの会合の最後では、この歌の7番までメンバーで歌ったという新聞記事があった。

加藤の妹久子氏のふたりの息子を見て——本村雄一郎氏(一九四三年生まれ)と本村正二郎氏(一九四五年生まれ)である——「この子たちを見殺しにはしない」といった背景には、かつて存在した地域社会のなかで子どもを育てていくという意識があっただろうし、自分の子どもを戦争にとられているが、この子たちは戦争にはとられたくないという願望があっただろう。そういう考えに加藤は共鳴したからこそ「荒井作之助」という筆名を遣ったに違いない。

第5段落

しかしいくさの終りそうな気配は、さしあたり、すこしも感じられなかった。再び夏が来たときに、沖縄を占領し、東京や大阪を焼き払った米軍は、艦載機で中小都市の爆撃をつづけ、艦隊は、日本の沿岸にあらわれて、艦砲射撃を加えていた。日本側には、もはやほとんど何らの抵抗もなかった。それでも政府は、「本土決戦」と称して、「竹槍戦術」「焦土戦術」「敵を水際にひきつけて粉碎する」策などを、まことしやかに唱えていた。大新聞は「一億玉砕」と書き、「悠久の大義に生きる」大和魂を讃美し、「鬼畜米英」に屈して生きる道はないのだ、と力説していた。(215頁、改243頁)

[1] 1945年初夏

「再び夏が来た」とは、1945年の初夏のことである。沖縄にアメリカ軍が上陸するのが4月1日、沖縄を完全に占領するのが同年6月24日である。アメリカ軍の日本本

土に対する空襲は、当初は、北九州、東京、名古屋、大阪、神戸といった大都市を対象に行なわれたが、次第に中小都市に拡がっていく。空襲は太平洋の小島——サイパンやグアムやテニアン島——から発進した大型爆撃機だけではなく、航空母艦で接近し母艦から発進する爆撃機で行うこともあった。さらには戦艦を沿岸近くまで寄せて、戦艦から砲弾を発射する「艦砲射撃」が加わった。アメリカ軍の艦砲射撃は、沖縄、釜石、日立、浜松などで行われたが、それは1945年6月から7月にかけてのことである。要するに、このころには、日本列島周辺の制海権も制空権も帝国軍隊は失っていたことを意味する。

[2] 「始める」より「終わらせる」ほうがむつかしい

にもかかわらず、大日本帝国政府は、戦争をとめられない。いったん始めた戦争を止めるには、相当の判断能力と相当の勇気がある。そのどちらも大日本帝国政府はもち合わせていなかった。「竹槍」で対抗できると考え、日本のすべを「焦土」にしても戦いつづけると唱え、「水際」までひきつけて一気に反攻することを思い描いた。いずれも空想の域を出ずに、正気の沙汰ではなかったが、戦争というものは、前線においても銃後においても、人間に正気を失わせるものである。

大日本帝国政府と一体化した日本のメディアは「一億玉砕」を掲げて、世論を鼓舞する。人びとも「悠久の大義」や「鬼畜米英」を信じたか、あるいは信じたふりをして、少なくとも異議は唱えなかった。

第6段落

上田の療養所では、事務長が先頭にたち、「防空演習」をした。小さな水溜めから桶で水を汲み出し、一列にならんだ看護婦たちが、それを次々に手渡しして、最後に焼夷弾にふりかける。水ばかりでなく、砂も用意されていたし、鉢巻きをし、脚絆をつけ、かいがいしい身なりをした事務員もいた。しかし防空壕も、一台のポンプもなかった。院長は苦笑しながら、事務局長の指揮する演習を見ていた。「米軍からみて、この町に爆弾を落としても、意味がないのではないかしら」と私はいった。院長は笑いだした、「そんなことをいうと、この人たちは、侮辱されたと思うぜ。日本で東京につぐ目標は上田市だと考えているからね」「万一来れば、焼けますね」「もちろん。しかし、君、政府が上陸用舟艇に、竹槍でたち向えといいだす時代だ、わかりきったことが、わからなくなっているのだな……」「政府は本気だと思いませんか」「そうであってもらいたくはないが、……」——私たちが院長室で話していると、病室を叫んで廻る看護婦の声が聞こえてきた、「歩ける人は、皆外へ出て下さい。重症の方以外は、皆外へ出て下さい」。太った院長は、煙草の火を灰皿に押しつけて消し、肘掛椅子からゆっくりと立ち上がりながら、私の方へ目くばせをしていった、「やれやれ、よい天気だ、少し外へ出てみましようか」。(『羊の歌』「八月一五日」)。(215—216頁、改244頁)

[1] 防空演習の意味

「防空演習」とは、戦時の空襲を想定して、被害を最小限にとどめるために行われる訓練である。日本で行なわれた最初の防空訓練は1919年まで遡る。日中戦争が始まっ

た1937年に防空法が施行され、行政は市町村に対して防空計画の設定を義務づけ、町内会を使って防空演習を義務づけた。防空頭巾をつくり、町のあちこちに防火用水を貯え、バケツリレーを練習し、地面に伏せて耳や目を護る訓練などを行なった。それがどれほどの効果があるかについては、ほとんど誰も疑問を表わさない。ものいえば咎められ、疎んじられ、蔑まれるからである。かくして、信じていようと信じていたふりをしていようと、一所懸命に防空演習を行なった。しかし、大型爆撃機による大都市の空襲には、防空演習は何の役にも立たなかった。

空襲を受けて隣近所が焼けたなかで、真面目な人びとは、みずから避難することを潔しとはせず、必死に消火活動に従い、結局、いのちを落とした人が少なくなかった。

第7段落

七月の末「ポツダム宣言」の「無視」と「戦争完遂」の発表から、八月一五日の天皇の放送まで、ほとんど何ごとも手につかぬまま、私は政府がどういう決定をするのか、どんな小さな徴候からでもそれを推定しようとして、新聞や放送に注意していた。広島原爆、ソ連の参戦、長崎原爆と、事態は急に進んでいた。もはや日本側が決定を先へ延ばすことはできず、「降伏」か、「本土決戦」か、そのどちらかが数日のうちに決まるほかはないと思われた。「降伏」ならば、生き残った人間が救われるし、「本土決戦」ならば、救われる可能性は、ほとんど全くない。しかし狂信的な軍国主義者が権力の中心から地方の病院の末端に至るまでみちあふれている国で、にわかに「降伏」が実現するだろうとは、容易に想像することができなかった。しかしまた「本土決戦」は、権力者たちが、死での道づれに国民の全体をまきこもうとする陰惨な自殺行為に他ならず——あまりに馬鹿げていて、ほとんどあり得べからざることも思われた。その頃、院長と二人だけで話すことの多くなっていた私は、病院の人々が、院長と私との間に、一種の反戦的な気分を感じとっているらしい、ということに気がついてきた。しかし「降伏」が決定されれば、もはやそんなことを心配する必要がなかったし、「本土決戦」が決定されれば、何を心配することも無意味になるはずであった。「勝手にしやがれ」という気が私たちの側にはあり、周囲にはまた敗戦の事実不安があって、進んで私たちの態度を責めるところまではゆかなかつたらしい。そして遂に「降伏」の決定がやって来た——それはめだたぬように、かすかな光の反映のように、私たちのところまで、とどいてきた。院長と私は、八月一〇日頃を境として、新聞が「決戦・玉砕・焦土作戦」の代りに、「国体護持」を強調しはじめたのを、見逃さなかった。「決戦」を主張する勢力の強いことはいうまでもないとして、支配層のなかに、「降伏」を唱える有力な勢力のあらわれたことに、もはや疑の余地はなかった。希望は大きくなった。一五日の「重大放送」が予告されたとき、私は降伏宣言の側に六分の期待をかけていた。(216—217頁、改244—246頁)

[1] ポツダム宣言以前の戦後世界へ向けての主な会談

①米英参謀会議(1941. 1～3)

ワシントンD.C.

アメリカ軍・イギリス軍・カナダ軍の参謀
アメリカ参戦に対する基本同意と計画策定

②大西洋会談 (1941.8)

アルゼンチア (ニューファンドランド)、カナダ

チャーチル首相、F.ルーズベルト大統領

領土不拡大、民族自決、貿易の機会均等、労働・生活環境の改善、軍備縮小、海洋の自由、国際機構の再建など8項目からなる

米国は武器貸与法をソ連に適用することを決定

1942.1 にソ連もこれを支持し、「**連合国共同宣言**」を発表

③アルカディア会談 (1941.12-1942.1)

ワシントンで開かれた**F・D・ルーズヴェルトと英国首相チャーチルとの会談**「アルカディア」Arcadia は暗号名

両国はヨーロッパの戦争に全力を集中し、太平洋の戦争は当分守勢とすること、米英合同参謀本部会議 Combined Chiefs of Staff Committee をワシントンへの設置を決定

④第1回モスクワ会談 (1941.9-10)

スターリン、ハリマン、ビーバーブルック

連合国がソ連援助を決定

⑤第1回ワシントン会談 (1941.12-1942.1)

チャーチル、ルーズヴェルト

ヨーロッパ優先の原則、連合国共同宣言

⑥第2回ワシントン会談

ワシントン D.C.、アメリカ合衆国 1942 年 6 月 19 日 - 25 日

チャーチル、ルーズヴェルト

イギリス海峡を越えての侵攻前に北アフリカ戦線において、第二戦線を作ることを優先することへの合意

⑦第2回モスクワ会談 (1942.8)

チャーチルとスターリン、ハリマン大統領特使 (米) の会談

北アフリカ戦線、北フランス上陸作戦について協議

⑧カサブランカ会議 (1943.1)

モロッコ・カサブランカで、チャーチルとルーズヴェルト、ドゥ・ゴールの会談

シチリア上陸作戦について協議、**枢軸国の無条件降伏の原則**

1944 年のイギリス海峡を渡っての侵攻計画の策定、フランス自由フランス軍と北アフリカ旧ヴィシー軍の統一

⑨第3回ワシントン会談 (1943.5)

ワシントン D.C.、アメリカ合衆国

チャーチル、ルーズヴェルト

イタリア戦線の計画、ドイツへの航空攻撃の増加、太平洋戦線への兵力増強

⑩ケベック会談(1943.8)

チャーチル、ルーズヴェルト、キング

D-デイを 1944 年に設定、東南アジアの指揮系統の再編成、核エネルギーの情報の共有

の制限を行ったケベック秘密協定の締結

⑪第3回モスクワ会談 (1943.10-11)

ハル、イーデン、モロトフ

⑫カイロ会談 (1943. 11)

チャーチル、ルーズヴェルト、蒋介石による会談 (スターリンは参加せず)

日本の無条件降伏、満洲・台湾の中国への返還、朝鮮独立の方針を宣言

日本政府と日本メディアは猛反発

⑬テヘラン会談 (1943.12)

チャーチル、ルーズヴェルト、スターリンの会談、三巨頭による最初の会議

三大国の協力を確認、北フランス上陸作戦を 1944.5 に行うことを決定

ドイツとその同盟国との戦争の最終的な戦略

⑭第2回カイロ会談 (1943.12)

チャーチル、ルーズヴェルト、イノニエ

連合国のトルコの飛行場の利用の同意、日本支配下のビルマへの侵攻の延期

⑮ブラザヴィル会議(1944.1-2)

ブラザヴィル (フランス領赤道アフリカ)

ド・ゴール、エブエらフランス植民地首脳

ヴィシー政権に対する抵抗と戦後フランス植民地に対するフランス連合内での自治権付与

⑯イギリス連邦首相会議 (1944.5)

チャーチル、カーティン (オーストラリア)、フレイザー (ニュージーランド)、マッケンジー・キング (カナダ)、スマッツ (南アフリカ)

イギリス連邦のリーダーがモスクワ宣言を支持し、連合国の戦争遂行においてそれぞれが努力を行っていくという同意

⑰ブレトン・ウッズ会議 (1944.7)

ブレトン・ウッズ、アメリカ合衆国、44カ国が参加

国際通貨基金と国際復興開発銀行の創設 (ブレトン・ウッズ協定)

⑱ダンバートン・オークス会議 (1944.8)

1944.8 にワシントン郊外のダンバートン・オークスで戦後の国際連合の基本を討議

米英中ソが参加、拒否権については先送り

⑲第2回ケベック会談 (1944.9)

チャーチル、ルーズヴェルト

戦後のドイツの占領計画モーゲンソー・プランの協議、その他の戦争計画

⑳第4回モスクワ会談 (1944.10)

チャーチル、スターリン、モロトフ、イーデン

東ヨーロッパ、バルカンの戦後の勢力範囲を定めたパーセンテージ協定の締結

(21) マルタ会談 (1945.1-2)

チャーチル、ルーズヴェルト

マルタ会談に向けての準備

(22) ヤルタ会談 (1945.2)

ヤルタ（ソヴェト連邦）での、チャーチル、ルーズヴェルト、スターリン
ドイツ降伏までの最終計画、ヨーロッパの戦後計画、国際連合における拒否権条項
ソ連の対日参戦、その代償として南樺太と千島列島のソ連帰属、中国東北地方における
ソ連の諸特権を与えた（秘密協定）

（23）国際機関に関する連合国会議（1945.4-6）

サンフランシスコ、アメリカ合衆国、50カ国の参加
国際連合憲章について

（24）ポツダム会談（1945.7-8）

チャーチル、スターリン、トルーマン、アトリー

日本の無条件降伏を定めたポツダム宣言、ドイツの処理に関するポツダム協定の制定

〔2〕ポツダム宣言

「ポツダム宣言」は、アメリカ、イギリス、中華民国の首脳によって、1945年7月26日に発表され、日本に対して無条件降伏を求めた共同宣言のことである。ベルリン郊外のポツダムで、アメリカ大統領トルーマン、イギリス首相チャーチル、ソ連首相スターリンによる巨頭会談のなかでまとめられたので、「ポツダム宣言」と呼ばれる。三巨頭の会談であったにもかかわらず、中華民国総統蒋介石が入っている理由は、三巨頭でまとめられたものに蒋介石が同意して署名したからである。そこにソ連が入っていない理由は、この時点で日ソ中立条約が有効で、そのためにソ連は署名をしなかったからである。8月9日にソ連が対日参戦すると同時に、ソ連はポツダム宣言に署名した。

「ポツダム宣言」は、日本の無条件降伏を求めただけではなく、戦後の日本に関する青写真を描いていた。軍国主義権力の永久除去、日本の主権が及ぶ範囲の限定（本州、北海道、四国、九州、および諸小島）、連合国の占領、軍隊の完全武装解除、言論の自由など基本的人権の尊重、平和的政府の樹立などが盛り込まれていた。「ポツダム宣言」の内容は、一部は実現したが、その後の世界が冷戦時代に入ったことの影響を受けて、大きく変質させられていく。

「ポツダム宣言」の通知を受けた日本は、軍部主戦派に押しきられた鈴木貫太郎内閣は、7月28日に「ポツダム宣言を黙殺する」と発表した。

ポツダム宣言を黙殺された連合国は、8月6日に広島に原爆を投下し、8月8日にソ連が対日参戦を果し、そして8月9日には長崎に原爆を投下したのである。

〔2〕新聞論調の変化——「聖戦貫徹」から「国体護持」へ

「八月十日頃を境として」新聞の論調に変化が見えてきたことを述べるが、長崎への原爆投下以後、新聞の論調は大きく変わっていく。それまでは「敵を殲滅する」といった調子だったが、一転して「皇国護持」（『秋田魁新報』8月10日）、「国体護持」（『讀賣報知新聞』8月11日）、「大御心を奉戴 最悪の事態に一億団結」（『朝日新聞』（東京）8月12日）、「私心を去り国体護持へ」（『毎日新聞』8月13日）が見出しに掲げられる。

8月14日に御前会議を開き、ポツダム宣言について議論を交わし、天皇の「聖断」によって同宣言を受諾すること、すなわち無条件降伏することを決めたのである。そし

て八月一五日に昭和天皇の「詔勅」がラジオを通して発表され、15年にわたる戦争は敗戦に終わった。

第8段落

八月一五日の正午に、院長は、医者も、看護婦も、従業員も、患者も——病院中を食堂に集めた。集った一同は、かたずをのんで、あの聞きとりにくい「玉音放送」を聞いた。放送の後、大きな息をひとつして、「これはどういうことですか」と事務長が、院長の方を向いていった。「戦争が終わったということだ」と院長は短く答えた。数十人の看護婦たちは——みんな土地の若い娘であった——何ごともなかったかのように、いつもの昼食の後と少しも変わらず、賑かな笑い声をたてながら、忽ち病室の方へ散っていった。戦争は遂に——どんな教育にもかかわらず、またどんな宣伝にもかかわらず、娘たちの世界のなかまでは浸みこんでゆかなかつたのである。事務局長をはじめ、職員や、疎開の医局員の多くは、沈鬱な表情をしていた。しかし涙を流した者はひとりもいなかった。私は院長室にひきあげると、院長と姐rぞれの想いに耽りながら、だまって院長が入れた緑茶をすすった。今や私の世界は明るく光にみちていた。夏の雲も、白樺の葉も、山も、町も、すべてはよるこびに溢れ、希望に輝いていた。私はその時が来るのを長い間のぞんでいた、しかしまさかそのときが来ようとは信じていなかった。すべての美しいものを踏みにじった軍靴、すべての理性を愚弄した権力、すべての自由を圧殺した軍国主義は、突然、悪夢のように消え、崩れ去ってしまった——とそのときの私は思った。これから私は生きはじめらるだろう、もし生きるよるこびがあるとすれば、これからそれを知るだろう。私は歌いだしたかった。(217—218頁、改246—247頁)

[1] 玉音放送の受け止め方

「玉音放送」とは、天皇みずからが敗戦の詔勅を読み、敗戦の事実を国民に知らせるために行われた録音放送のことである。録音は8月14日深夜に宮内庁にある天皇の政務室で行なわれた。録音された円盤は日本放送協会にもちこまれ、8月15日正午にラジオ放送された。

日本の降伏に反対する近衛師団の反乱軍は、この録音盤を奪取しようと宮内庁に乱入し、あるいは日本放送協会の建物を一時占拠したりする混乱はあったものの、放送は大過なく行なわれた。敗戦の詔勅は以下のようなものである。

朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ
茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告グ

朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタ
リ

抑、帝国臣民ノ康寧ヲ図リ萬邦共栄ノ楽ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ
拳々措カサル所曩ニ米英二国ニ宣戦布告セル所以モ亦実ニ帝国ノ自存ト東亞ノ安
定トヲ庶幾スルニ出テ他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラ
ス然ルニ交戦已ニ四歳ヲ閲シ朕カ陸海將兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ励精朕カ一億衆
庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利ア

ラス加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ継続セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク且倚戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク朕軫念スル所ナリ惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ国体を護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク拳国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ国体ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサレムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ

裕仁 天皇御璽

昭和二十年八月十四日

この玉音放送は機械の調子が悪くて聞きとりにくく、かつ漢語が多い文章で、何をいっているかが分かりにくい放送だった。だから事務長が「これはどういうことですか」と院長に尋ねたのである。

しかし、玉音放送の効果は抜群であった。「鬼畜米英」「一億玉砕」「焦土作戦」といった標語およびそういう気分は、一朝にして雲散霧消してしまった。180度の方向転換につきものの混乱はほとんど何も生ずることなく、体制転換は表面上なし遂げられた。

余談だが、昭和天皇が述べた敗戦の詔勅をもう一度読みあげたのが、日本放送協会のアナウンサー和田信賢だった。その和田がパリで客死する直前に、加藤は和田を診察している。そのことは『続羊の歌』に触れられる。

[2] 体制への組み込まれ度の違い

「玉音放送」を聞いた人びとの様子が鮮やかに描かれる。「**事務長をはじめ、職員や、疎開の医局員の多くは、沈鬱な表情をしていた**」。事務長や職員、医局員のほとんどは成人男性だろう。男性優位の社会における成人男性は、社会への組み込まれる度合いが強くなる。したがって、成人男性たちは戦争教育に強い影響を受けたか、受けたように振舞う必要がある。そうでなければ、その社会からはじき出されることになる。しかし、権力から離れたところに位置する成人男性は、それほど深く大日本帝国政府と自分とを一体化させていないから、「涙を流した人はひとりもいなかった」のだろう。

一方、若い娘たちは大日本帝国政府からは成人男子よりもはるかに遠い。したがって、戦争教育も深くは浸透せずに、「どんな教育にもかかわらず、またどんな宣伝にもかか

わらず、娘たちの世界のなかまでは浸みこんでゆかなかった」のである。そういうことを明らかにしたのも「敗戦」という事実だろう。

第9段落～第10段落

病院のなかの空気は、八月一五日を境として、急に変った。そのまえには、事務局長をはじめ多くの人々が、院長や私に話しかけるのを、それとなく避けていた。その翌日から、院長室でこれという用件もないのに話しこもうとする人たちが多くなった。「つまり降伏ということになるわけですか」「軍人がだまっていないでしょう」「これから食糧の方は、どういうことになるのでしょうか」「占領というと、米軍が上陸して、この町にも来るということですか」——院長は、いくさに批判的な言説を弄していたのだから、いくさの終わった今、万事を説明することができるただひとりの人物であるはずだった！

「本郷へ帰ることを考えなければなりませんね」と私は内科教室の教授にいった。「冗談じゃない、どうなるかわからない、急いでもっと疎開させなければならない位です。と教授はいった。「何を疎開させるのですか」「笑いごとじゃないよ、君、敵が来たら何もかもとられてしまう」「そうでもないでしょう。第一、先生、物量を誇る米国といって来たばかりじゃないですか。米国人は、本郷の研究室にある程度のものは、掠奪しなくても、もっているんじゃないですか」「戦争というものはそんなものじゃありません。女がいちばん危い。東京に残っている女性は疎開させなければ、どうされるかわからんよ」。(218—219頁、改247—248頁)

[1] 人々の反応

前段から本段、そして次段で、敗戦を迎えた人びとの反応が描かれる。昨日までは、戦争に批判的な人として避けていた院長に対して、今日からはつき従う人として親近感を示して近づいてくる。いつの時代だって、変わり身の早さを器用に見せる人がある。事務員たちは変わり身が早い、まだ事態がつかめない。しかし、世のなかの前提が覆ったことは分かり、もっとも事態を理解しているだろう院長にすり寄ってくる。周囲の雰囲気は「急に」変わったのである。

一方、看護婦たちは、戦争が続こうが終わろうが、何も変わらない。屈託なく笑い転げている。権威も権力ももたない人は、時流にいちばん遠いところにいる。それがかえって自由をもたらすこともある。

内科教室の佐々教授は、権威があるだけに権威を失いたくない。しかも、変わり身の早さを見せるには誇りが許さない。したがって、急に態度を変えられず、事態の変化についていくことができない。

それにしても、一日にして「鬼畜米英」「軍国日本」から「アメリカ礼讃」「平和国家日本」へと変わったことは、やはり驚異的なことである。その変化について身をもって経験したことは、加藤に大きな影響を及ぼし、加藤の思索・著作活動の中核に位置する問題意識になっていく。そのことについては『続羊の歌』に詳しいので、そこで考えることにしたい。

第11段落

追分では、農家の人々が、それまで大事にしていた鶏を殺して酒盛りをしていた。どうせ米軍にとられてしまうだろうまえに、食ってしまえ、ということであった。追分の退役軍人一家には、娘むこの青年将校が私服に着替えて、帰ってきた。その後しばらくの間、彼の主な仕事は、炊事用の薪を割ることであった。またどこからか軍服の将校が馬であらわれて、中山道の宿場のまえで抜刀し、占領軍が来たら斬ってみせる、と豪語するというようなこともあった。水汲みに来た老人は、その話をした後で、「ほんとうに来たら、どんなもんだかね」といって笑った。「おじさんは、皮肉なのねえ」と妹はいい、「ほんとうに斬る気なら、女子供のまえで刃など抜くものじゃござせん」と老人は大声でいった。栄養不良で痩せ衰えていた片山教授は、「民主主義が勝った、これで世界がよくなるのです」と興奮して話していた。千ヶ滝には、その頃、中村真一郎も住んでいたし、医学部で同級だった私の別の友人も住んでいた。また私は築地小劇場で活躍していた俳優の鶴丸さんを、訪ねたこともある。「民主主義の勝利だって？ そんなことはありません」と鶴丸さんはいった、「帝国主義相互の戦争が一方の勝利に終わったということにすぎない。もちろんポツダムには、民主化の条項があるでしょう、しかし米国の占領軍は、きっと、日本の支配階級を温存するだろうね、見ていてごらんささい……」——私はそうは考えていなかった。占領軍は、日本の軍隊を解体し、民主化を徹底させ、おそらく経済的な援助をしても、無視できない市場としての日本を復興させるだろう、と思っていた。そのとき「冷い戦争については、何も知らなかったし、民主化の徹底（財閥解体を含むところの）と経済的な復興との間にあり得べき矛盾については、少しも考えていなかった。私がそういうことに気がつきだしたのは、戦後しばらく経ってからである。千ヶ滝の鶴丸さんの家には、美しい娘さんも住んでいて、優しく、快活で、聡明で、私には日本の若い娘の理想の姿のように思われた。しかし私は彼女をほとんど知らなかったし、またその後知る機会もなかった。東京の「戦後」は、四五年八月以前のすべてを、押し流してしまったように思われる。千ヶ滝の林のなかの小さな家、その家に住む父娘の、あの鮮かな印象さえも。(219—220 頁、改248—249 頁)

[1] 農民の反応、知識人の反応

農家の人びとは必ずしも「大日本帝国」の精神運動に心からの共感を抱いていたわけでは必ずしもない。敗戦であろうと戦争が終わったことは喜ばしいことであり、「大事にしていた鶏を殺して酒盛り」をして敗戦を祝ったのである。

軍人のなかに表れたふたつの反応を描く。ある青年将校は、変わり身早く、すぐに軍服を捨てて、私服に着替えて帰ってきて、薪を割ることを日課とした。ところが、事態に対応できない将校は、刀を振りまわして自らの存在を訴えるだけである。戦争が負けに終われば、軍人はものの役に立たない。「水汲みに来た老人」は、さきほど触れた荒井作之助だが、軍服の将校の虚勢を見抜いて、聞こえよがしに大声でいったのである。ここも二階建て二項対照法によって描かれる。

この件も二項対照法によって、知識人の敗戦後の日本の行方に対する見解の相違を浮

かびあがらせる。片山敏彦は「民主主義の勝利」だと考え、日本も世界もよい方向に進むと断言する。つまり、戦争を「民主主義とファシズムの戦い」だと理解していた。それは欧米の左翼思想以外の人たちの第二次世界大戦に対する位置づけと同じである。

しかし、「築地小劇場の」とわざわざ断っているのは、左翼思想の持ち主だったことを明らかにするためだが、俳優の鶴丸は「帝国主義同士の戦い」と位置づけているので、民主主義の勝利だとは考えない。連合軍——といっても実際にはアメリカ軍なのだが、日本の支配層を温存すると予測した。

「鶴丸さん」とは、鶴丸睦彦（1901—1989）である。鹿児島県の医師の長男に生まれた。一九二三年に渡米し、のちにスペインに渡る。1927年に帰国し、前衛劇場、東京左翼劇場、新協劇団に参加。戦後は民芸に所属した。1934年には、村山知義脚本、久保栄演出の『夜明け前』に出演する。おそらく加藤はこの芝居を築地小劇場で見ているはずである。

加藤は戦争を「民主主義とファシズムの戦い」と理解していたので、アメリカ政府は、日本の民主化を徹底させると予測した。その点では、欧米自由主義者たちと同じ考えをしていた。その考えは、東京の焼け野原を目の当たりにしたときの感想にも表われている。

しかし、その後の日本の歴史は鶴丸の分析の正しいことを証している。今日ますますその正しさは明らかになってきたといえるだろう。

第12段落

九月のはじめまで、上田の内科教室は東京へ戻らなかった。追分村の家では絶えず食糧の心配があり、私はその方の手配にも奔走しなけりなかつた。信越線は混んでいた——というよりも、復員と買出しと家族をもとめて彷徨う人々で溢れ、汽車の窓から出入りするのあたりまえのことであつた。母と妹が子供連れで旅することは、しばらくの間不可能だと思われた。私はひとり東京へ出かけ、上野駅で、焼け野原になつた東京を見た。私は四一年一二月八日の私自身の予想が、的中したこと、みずからおどろいていた。あのいくさを歓呼して迎えた人々は、どこへ行つたのか。それよりも彼らをだまし、死地へ追い立て、敗色濃くなるや、「焦土作戦」などという無意味に残酷なうわ言を口走つていた人々は、一体どこへ行つたのか。またそういう指導者たちに諂ひ、「死ぬことは生きることだ」とか、「桜花のように散るのが大和魂である」とか、人間の生命を軽んじることさえも理うつらしいものをつけ加え、自他を欺くことに専心していたあの御用学者・文士・詩人は、どこへ行つたのか。私にとっての焼け跡は、単に東京の建物が焼き払われたあとではなく、東京のすべての嘘とごまかし、時代錯誤と誇大妄想が、焼き払われたあとでもあつた。「不逞の敵機が皇居の上空に及べば神風で墜ちる」ということばが、嘘であつた、あるいは少くともまちがひであつた、ということ、すべての日本国民に向つて、否定の余地のないように、明らかに示しているのが、焼け跡であつたのだ。嘘は、嘘だとわかれば、もはや何の意味も残さない。焼き払われた東京には、人の心をうつ廢墟も、水火に堪えて生きのこつた觀念も、言葉もない。ただ巨大な徒勞の消え去つた後にかぎりない空

虚があるばかりだ、と私は思った。しかしもはや、嘘も、にせものもない世界——広い夕焼けの空は、ほんとうの空であり、瓦礫の間にのびた夏草はほんとうの夏草である。ほんとうのものは、たとえ焼け跡であっても、嘘でかためた宮殿よりも、美しいだろう。私はそのとき希望にあふれていた。私はそのときほど日本国の将来について、楽天的であり、みずから何事をなさんとする勇氣にみちていたことはなかった。私はまだ何ごともし始めていなかったのだから、凛々たる勇氣の挫けようもなかった。日本国を知らなかったのだから、悲觀的になるはずもなかった。そして東条内閣の閣僚たちは、まだ戦後日本の指導者として返り咲いてはいなかったから、たしかに希望もあったのである。足りなかったのは、食糧である。しかし人はパンのみにて生きるものではない。(221—222 頁、改 249—251 頁)

[1] 焼け野原の東京をみる

上田に疎開した佐々内科教室が東京に戻るのは9月に入ってからである。その前に加藤はひとりで東京に戻った。加藤は上野駅に降りたって、加藤の眼に映ったものは焼け野原と化した東京であった。しかし、加藤が見たものは、建物が焼きはらわれた光景だけではなかった。「嘘とごまかし、時代錯誤と誇大妄想」がすべて焼きはらわれた光景でもあった。

「広い夕焼けの空」と「瓦礫の間にのびた夏草」は、偽物ではなく、本物の象徴である。本物の広い空の下に、夏草が伸びる大地の上に、嘘で固めた宮殿ではなく、たとえあばら屋ではあっても、そこに建てられるものは、人間を大事にする思想であり、文化であり、政府であり、なにより人間自身だ、と加藤は考えたに違いない。少なくともあふれるような希望を加藤はもった。

加藤は孤独を生きつづけてきた。その加藤が人びとに対する強い連帯感をもったのが、空襲下の被災者への治療をしている最中のことであり、加藤が社会に、人びとに対して何ごとかをなさんとする勇氣をもったのは、戦災で一望の焼け野原と化した日本の光景を目の当たりにしたときのことであった。

軍国主義がほろび、日本国に言論の自由が恢復されてから、私は文筆業を業として今日に及んだ。その間二〇年、私の作文の、私事にわたることは、ほとんどなかった。今俄かに半生を顧みて思い出を綴る気になったのは、必ずしも懐旧の情がやみ難かったからではない。私の一身のいづらか現代日本人の平均に近いことに思い到ったからである。

中肉中背、富まず、貧ならず。言語と知識は、半ば和風に半ば洋風をつき混ぜ、宗教は神仏のいずれも信ぜず、天下の政事については、みずから青雲の志をいだかず、道徳的価値については、相対主義をとる。人種的偏見はほとんどない。芸術は大いにこれをたのしむが、みずから画筆に親しみ、奏楽に興ずるには到らない。——こういう日本人が成りたったのは、どういう条件のもとにおいてであったか。私は例を私自身にとって、そのことを語ろうとした。

題して「羊の歌」というのは、羊の年に生れたからであり、またおだやかな性質の羊に通うところなくもないと思われたからである。

はじめ「羊の歌」は、一九六六年一〇月から翌年三月まで、「続羊の歌」は、六七年七月から一二月まで、「朝日ジャーナル」に連載した。累を他に及ぼすことをおそれて、現存の人の名まえをあげず、話にいづらかの斟酌を加えたところもある。

今「岩波新書」に収めるにあたり、重複を削り、辞句を正した。そうすることができたのは、海老原光義氏（岩波書店）の激励と助言によるところが実に大きい。あらためて加社の意を表したいと思う。

一九六八年初夏・東京

著 者

(223—224 頁、改 253—254 頁)

この「あとがき」で、なぜ『羊の歌』を綴ったのかを語る。「私の一身のいづらか現代日本人の平均に近いことに思い至ったからである」という。

中肉中背、富まず、貧ならず。言語と知識は、半ば和風に半ば洋風をつき混ぜ、宗教は神仏のいずれも信ぜず、天下の政事については、みずから青雲の志をいだかず、道徳的価値については、相対主義をとる。人種的偏見はほとんどない。芸術は大いにこれをたのしむが、みずから画筆に親しみ、奏楽に興ずるには至らない。

これは、たしかに平均的日本人の表象であろう。これが加藤にすべて当てはまるかどうかについては異論もあるだろうが——だから「いづらか」と限定している——、自分が平均的日本人の平均に近いという理由だけでは、いささか説得力を欠く。

『羊の歌』執筆には、それ以外の動機もあった。それは「加藤周一著作集第一四巻 羊

の歌」(平凡社、1979)の「あとがき」に書かれる。

三ツ児の魂百まで、は常に必ずしも当らない。しかし一九六〇年の私は四〇歳であった。四〇歳の男(または女)の性癖、嗜好、態度、立場の大部分は、おそらく死ぬまで変らない。故に『羊の歌』は、今日の私の起源をも説明するのである。

『羊の歌』は加藤の1960年までの半生が描かれるが、40歳となった自分は「死ぬまで変らない」という判断は、自分が完成したということであろう。少なくとも半生記の執筆を思いついた1960年代半ばには、自分が完成したという意識が加藤のなかに生まれたに違いない。少なくとも自分が完成したという意識がなくては、半生記も自伝もよく書けるものではない。

実際、加藤がいつ完成したかについて意見はいろいろとあろうが、『三題漸』(筑摩書房、1965)が刊行されるころだと私は考える。そのことについてはすでに拙著に述べたことなので、結論だけを繰り返しかえせば、『三題漸』は、石川丈山、一休宗純、富永仲基という三人の徹底した人生を描いたのだが、同時に加藤の「あり得たかもしれない自画像」を描いたのもあった。「あり得たかもしれない自画像」を描いた加藤は、「実際にあった自画像」を描いてみたい希望ももったに違いない。そして自らが完成したという意識が、その希望を後押しする。かくして成立したのが『羊の歌』である。

加藤周一がいかに「加藤周一」になったかを書けば、当然のことながら、そこに加藤の問題意識が表れる。『羊の歌』には、加藤の生涯を貫いて持続した問題意識、すなわち「知識人はなぜ戦争に反対できなかったのか」、そして「ひとびとは鬼畜米英、一億玉砕と叫んでいた翌日に、なぜ米国を素直に迎えられたのか」という問題意識が色濃く表れている。

加藤は一貫して戦争に反対であった。だから敗戦も喜んだ。それは平均的日本人の態度ではなかった。しかし、加藤は平均的日本人でも、私のように生きられたはずである、といたかったのだとも読める。

二一世紀に入って日本の姿は、歴史が一回転してまたしても「戦前」の状態に回帰したように見える。「鬼畜米英」と叫んだ人びとが、なぜ「平和と民主主義」を高らかに謳ったのか、という疑問は、次の疑問につながる。すなわち、「平和と民主主義」を高らかに謳った人びとが、なぜ「集団的自衛権」を認めるのか、という疑問である。

われわれは、戦前も今日も、少しも変わっていない、という思いを強くする。